



ホッブズ・コレクション

について

水 田 洋

ホッブズ・コレクションというのは、文部省の大型コレクション購入計画によって、昭和54年度と55年度に、名古屋大学が購入したコレクションであって、内容にできるだけ即していえば、『トマス・ホッブズを中心とするイギリス近代思想史原典コレクション』ということになるだろう。1期と2期をあわせて779点で、名古屋大学中央図書館所蔵貴重図書、の半ば以上が、このコレクションによってしめられる。ただし、いま「できるだけ即して」とかいたのは、2種の例外がふくまれているからで、その第1は、19世紀末(L. Stephen)以降のホッブズ研究書数冊、第2は、ギリシャとフランスの哲学・論理学・教育学関係の著作数十冊である。第1グループは、とうぜん貴重書のなかにははいらないが、フリチョフ・ブランドの『ホッブズの自然概念』のように、日本には1冊か2冊しかないとおもわれるものをふくんでいる。また、第2グループは、ホッブズがアリストテレスの修辞学の解説をかいたり、トゥキディデースのペロポネソス戦争の翻訳をしたりしたことを考えれば、このコレクションにふくまれていてとうぜんだといえる。しかし、第2グループのなかでも、コレクション第2期(昭和55年度購入分)として購入されたものは、むしろ、ホッブズをふくむ近代ヨーロッパ思想史のなかの、論理学・教育学的部分とみる方が正確であろう。

一般に、第2期は第1期にくらべて、ホッブズからへだたっているが、それは、第1期がイ

ギリスのホッブズ研究者によって、戦後約30年のあいだに、研究上の必要からあつめられたものであるのに対して、第2期はそれを補充し拡大する意図でデュヴァル書店によってあつめられたという、ちがいがあるからである。

最初にあつめた研究者は、名前をだすのをこのまなかつたし、このコレクションを売却することも、ためらいがちであった。この研究者の心理は、身にしみてわかる。なぜなら、かれは、これだけの材料をあつめながら、ホッブズ研究者としては、まだとるにたりる成果をもっていないのだからである。いまこの時点で、コレクションを売却することは、自分の研究者としての能力と前進に見きりをつけることを意味するのだから、自殺にひとしいわけだ。売却をためらうかれを、くどきおとすために、デュヴァルは、名古屋大学に売るつもりだから、といったのだそうだが、その時点では名古屋大学には購入の意志も能力もなかった。貿易黒字べらしという学問外的な事情がなかったなら、古本屋がうそをついて蔵書を買いためた、というだけのことになっただろう。もちろん、名古屋大学に「売るつもり」だという自由は、だれでももっているのだが。

名古屋大学経済学部所蔵のジョン・ロック全集には、1932年に血盟団員に射殺された元蔵相、井上準之助の蔵書印があつて、これは1950年に神田の古本屋から購入したものだが、その所有者(故人、当時東大助教授)は、名古屋大学に

売るという希望条件をつけて、その古本屋に売却したということであった。ホップズ・コレクションも、条件のつけかたがすこしちがうが、とにかくおさまるべきところにおさまったのである。あとは、どう活用するかということだ。

どう活用するかは、主として利用者側の問題であって、このコレクションがどれだけの可能性を秘めているかを、断定することはできない。だからここでは、いくつかの特徴をあげるにとどめなければならない。

第1は、いうまでもなくホップズ自身の著作であるが、これは翻訳をふくめて63点で、主著『リヴァイアサン』の初版初刷がないのは残念だとはいえ、これだけあつまったのは世界でもあまり例がないだろう。ホップズには、まだげんみつなテキスト・クリティクを経た全集がないので、各版をじっさいに対照することが、必要になるばあいがあるかもしれないのである。

第2は、ホップズの同時代の論敵および支持者の著作である。これは、ホップズにどの程度の言及があればこの分類にいれるかということをしめなければ、点数をあげることができないが、ブラムホールをはじめとして主要なものは、ほぼふくまれているとおもわれる。とくに第1期は、ここに収集目標のひとつがあったらしく、フィールディングの *Miscellanies* まではいっているのには、おどろかされる。これなどはむしろ、ここにはいっていることによって、ホップズとの関係を指摘されたようなものであった。おそらくホップズ研究者にとっては、この部分がもっとも重要であろう。

第3は、ホップズ批判者にふくめてもいいかもしれないが、ケンブリジ・プラトニストの著作が、カドワース、ノリス5点ずつはいいい

ることで、とくにノリスは日本では他にないだろう。第4は、逆にホップズの継承者ともいえるべき、理神論関係の著作で、日本では、中央大学が購入したウラジミア・プライス蔵書につぐ規模である。

第5は、ジョージ・パークリとジェリミ・ペンサム の著作で、それぞれ11点と21点あつまられている。パークリには、数学の論敵ジュリーの著作もつけられているので、数学史・科学史の研究にも役だつかもしいない。ペンサムはすでに、永井義雄『ペンサム』(講談社、1982年)によって利用された。

第6は、ロージャ・アスカムから19世紀なかばにいたるイギリス(およびフランス)の教育論で、これは、『ポール・ロワイヤル論理学』のようなものをのぞいて、約55点もある。つまり、これがホップズとその周辺について、おおきなグループだというわけである。日本では、教育学の水準(とくに戦前の)がひくかったので、この種の資料の蓄積はほとんどない。

さいごに、いちばんおもしろい部分がくる。それは、以上の網にかからなかった、雑魚であって、そのなかには、数が少ないために雑魚の仲間いりをさせてしまった一流品もあるが、それよりも、雑魚のなかから二流品三流品をひろいだして、うまい料理をつくるのが、古典研究の腕のみせどころであり、たのしみでもあるのだ。

なお、中央館にすでになんかの蓄積があるスコットランド啓蒙思想、経済学部がかなりもっているイギリス経済思想が、それぞれ10点をこえる規模でふくまれていること、ホップズの肖像画(油絵)という途方もない貴重品がふくまれていることを、つけくわえておこう。

(みずた ひろし・経済学部教官)